演題番号14

過去の行為経験を活用した訓練による身体経験への影響
- 当事者1名の語りの分析から -

○吉田 俊輔[1)]高木 泰宏[1)] 上田 将吾[1)] 塚田 遼[2)] 山中 真司[2)] 加藤 祐一[1)]

1) 結ノ歩訪問看護ステーション
2) 結ノ歩訪問看護ステーション東山

【はじめに】
近年，認知神経リハビリテーションでは訓練と現実の行為の間の繋がりを重視し，行為間比較が提案されている．行為間比較では過去に経験した当事者固有の行為が様々な比較に用いられる．本研究では過去の行為経験の活用による身体経験への影響を当事者の語りから明らかにすることを試みた．

【方法】
理論的枠組としてSteps for coding and theoraization（SCAT）を採用した．対象となる当事者1名に対し40分程度の半構造化面接を行い，録音した音声からテクストを作成しSCATの手順に沿って質的研究経験者5名と共に分析した．テクストの解釈を深める為に再聴取する必要があると判断した箇所について追加で2回，各15分程度の面接を実施した．

【当事者紹介】
60歳代の女性．X年に右脳腫瘍内出血を発症し左片麻痺を呈する．Brunnstrom recovery stageは上肢Ⅱ，手指Ⅱ，下肢Ⅲであった．発症初期のみ左半側空間無視を認めていたが早期に日常生活に影響のない程度に消失しその後も明らかな高次脳機能障害を認めない．週1回1時間の訪問でのリハビリを受けている．面接時X年＋5年が経過している．

【結果】
分析により得られた15個の構成概念からストーリーラインを作成した．発症時に経験した〈麻痺手の存在感の希薄化〉は〈不明瞭な身体連続性〉に影響した．この影響により〈主体感を失った身体〉は〈手間のかかる存在〉と認識され，〈葛藤対象〉となったことから〈意図的思考回避〉が生じた．その後に訓練として施された〈行為経験の参照〉は〈行為経験に内包された感覚〉を探る契機となり，〈廃用促進〉がなされていた麻痺手を用いる行為において〈親しみある手応え〉をもたらした．結果，麻痺手の認識が〈自明な存在〉へと変容し〈行為可能性の芽生え〉が生じた．生活場面において〈行為に伴う身体〉を経験する形で〈回復の実感〉を得た一方で〈具体的課題の自覚〉に至った．

【考察】
結果から行為経験を活用した訓練によって〈親しみある手応え〉という経験をもたらし，これを契機に身体の認識や行為可能性に影響したことが示唆された．このことから行為経験の活用は訓練と現実の行為との間に「親しみ」という形で繋がりをもたせる可能性が考えられた．

【倫理的配慮（説明と同意）】
本研究の主旨，プライバシーの保護について説明し同意を得た．